

## ■ 書 評 ■

木村 涼子 [著]

## 『学校文化とジェンダー』

日本学術振興会特別研究員 堀 健志

人はいかにして女性／男性となるのか。本書は、「フェミニスト教育研究」におけるこの核心的なテーマに取り組んできた著者の既発表論文に、いくつかの書下ろしを加えた待望の論文集である。

収録論文が執筆されたこの10年を振り返ってみれば、フェミニズムの存立それ自体が明確に問われた時代であった。もし、この思想がすべての女性の〈解放〉を企図するものであるならば、避けては通れないそんな性質の課題である。そのひとつは、フェミニズムが表象する「女」とはいったい誰のことかという問いで表現された。これまで築かれてきたものが日本人・高学歴・異性愛女性 etc. のための理論でしかないという認識にもとづくこの批判は、集団としての女性を貫く多様な差異／差別といかに向き合うかを課題とするものである。もうひとつは、「個人的なことは個人的である」という自由主義的な主張が「次世代のフェミニズム」として流通したことに表れた問題である。多数派の女性がこうした主張を受け入れ、「個人的なことは政治的である」というリブ／フェミニズムのスローガンが「余計なお節介」でしかなくなるとしたら、フェミニズムと個人との間に必ずや生じるであろう溝を見つめることすらできなくなる。そのため、女性

役割を主体的に選択／受容するメカニズムの解明が、改めて重要な課題となっている。

したがって、今日のフェミニスト教育研究は、固有の対象である教育現象の分析において、フェミニズム界全体にかかわる上記の課題に取り組むことが求められている。そして教育分析の文脈では、そのための条件が整っているといえる。なぜなら、これまでは教育の結果として生じる教育達成や職業達成の性差に焦点が当てられてきたが、近年では、教育過程におけるジェンダー形成の分析へと関心が移った結果、学校のなかの「かくれたカリキュラム」、マスメディアや生徒文化にかんする具体的な資料に基づいた分析の蓄積が課題となっているからである。ただし、この領域では理論志向が弱く、フェミニズム理論と関連づける作業が明示的になされることは稀であったため、学校制度をフェミニズム理論に位置づけるという重要な課題もまた残されているといえる。

実際、本書はこれらの課題への取り組みとされているが、どの程度成功しているだろうか。まず、学校の理論的位置づけには成功している。著者が採用するマルクス主義フェミニズムによれば、現代資本制社会は家事労働者としてだけでは

なく、周辺労働者としての女性を必要とする。だからこそ学校は、労働力一般として男女を均質化する平等主義と、家事労働者として女子を差別化するセクシズムという二つの矛盾したイデオロギーを共存させることで、この要請に応えようとする。こうして、相反する二つのイデオロギーの流通に注目することで、学校を、平等化の装置／女性抑圧の装置と単純に捉えるのではなく、労働力と社会関係を再生産するイデオロギー装置と捉えることに成功している。

次に、女性内部の多様な差異／差別についての検討であるが、たしかに、出身階層による違いや被差別部落の女性への言及がみられる。とはいえ、利害の対立や葛藤が描かれることもなく、女性がカテゴリーカルに分類されるにとどまる。評者としては、学校内部の観察を活かして、ジェンダーとその他の差異との絡み合いを描きだしてほしかった。また、被差別部落の女性への聞き取りが示唆されるのだが提示されないのが、残念なことに、読者の耳に彼女たちの声は届かない。

性役割の主体的選択の解明という課題についてはどうだろうか。著者は日本の少女向けメディアを分析して、他者への共感や思いやりが「女としての成熟」の表象となっていることを明らかにし、これが「女らしさ」の物語として流通し消費されるなかで、少女たちが他者のケア＝再生産労働の担い手として水路づけられる可能性を示す。さらに、性役割の主体的受容を理論的に検討して、有力な三つの仮説を分節している。ここでは具体

的な研究の必要性を訴えるにとどまるが、多様な差異を考慮に入れつつこれを本格的に検討していくことで、フェミニズムと個人との間にある溝を見つめなおすことが可能になるだろう。

このように本書はセクシズムの再生産を検討するが、単純な再生産を想定しているわけではない。随所にみられる「変革の主体」やイデオロギーに対する「受け手の能動性」といった概念は、セクシズムの再生産過程に矛盾や葛藤をもたらすものとされ、男女平等志向の読者に対して希望の光を与えてくれる。そうであるだけに、これらの魅力的な概念の指示対象が具体的に提示されないのが惜しまれる。この点は、具体的な資料の丹念な読み込みに加えて、理論的な検討をすすめることによって取り組まれるべき課題であろう。

以上、フェミニスト教育研究の重要課題に対する貢献と及ばなかった点について概観してきた。では本書は、マルクス主義フェミニズムによる教育分析の蓄積に対して、いかなる貢献をもたらしているだろうか。この点は、著者にとっては今後の課題なのであろう。終章「資本主義社会におけるセクシズム再生産の理論化に向けて」において、英米の先行研究が紹介されているものの、本書の位置づけが明確にされていない。また、本書が及ばなかった上記の課題に対する取り組みが海外では既に蓄積されていることも、終章から明らかである。しかし、こうした欠点は本書の意義を損なうものではない。既存のフェミニズムに対する批判から導き出された重要な課題を、日本